

# キャリア・ポートフォリオ活用による特別活動の今後の可能性 —教員養成課程の学生の記述を通して—

胡田 裕教  
(非常勤講師)

## Future Possibilities of Special Activities by Utilizing Career Portfolio —Through the Descriptions by Students in a Teacher Training Course—

Hiroyuki EBITA  
(Part-Time Lecturer, Aichi University of Education)

### 要約

新しい学習指導要領において提唱されたキャリア教育の推進が注目されている。文部科学省は、特別活動を要としたキャリア教育という枠組みの中で、記述し蓄積する教材である「キャリア・パスポート」の活用を推奨した。全国ではそれをもとにしてカスタマイズされたキャリア・ポートフォリオが作成された。本稿では、その中で、文部科学省の「キャリア・パスポート」と愛知県のキャリア・ポートフォリオを取り上げ、その成熟の程度について学生による記述の分析を行った。その結果から特別活動で活用するキャリア・ポートフォリオ、並びにキャリア教育の今後の可能性を考察することを目的とした。本稿の調査内容をキャリア・ポートフォリオの発展の過程と捉えた上で示された結果を整理すると、①キャリア・ポートフォリオ活用の際、教科の視点が今まで以上に加えられたこと。②キャリア・ポートフォリオをより自分事として捉えやすくなったこと。という2点が明らかになった。その上で、「自分事」を形成するために必要となる教育的仕掛けについて主体性ととも考察した。

Keywords: キャリア・ポートフォリオ、教育的仕掛け、主体性

### I 問題の所在

新しい学習指導要領（文部科学省，2018a、2018b、2019a）は、小学校で令和2年度（2020年度）、中学校で令和3年度（2021年度）からの実施開始に続き、高等学校では学年進行で令和4年度（2022年度）から実施されることになっている。その中で、「キャリア教育」が強調されその推進が提唱されている。一方、現在、あるいはこれからの時代を見据えて、試行錯誤しながらも新しい課題に対応することが求められるとする知識基盤社会において、子どもたちがたくましく生き抜くために必要な資質・能力を育成することが大きな課題となっている。つまり、こうした社会の動きに対応した上で新たな社会の担い手を育成していこうとする中で、キャリア教育を推進しようとする動きは大きく関連しているだろう。

新しい学習指導要領では、その方法論の一つとして、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図る中、記述し蓄積する教材「キャリア・パスポート<sup>1)</sup>」の活用を推奨してきた。文部科学省（2019b）では、『キャリア・パスポート』とは、児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしな

がら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。なお、その記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない<sup>2)</sup>として、平成30年6月に設置した「キャリア・パスポート」導入に向けた調査研究協力者会議において定義づけた。また、同じく文部科学省（2019b）では、キャリア・パスポートの活用という新しい取り組みを行うことより、全国的な周知・理解のため例示資料を作成し提示した<sup>2)</sup>。その中で、キャリア・パスポート運用の留意点として、各地域の実情に合わせ、あるいは各学校の創意工夫のもとカスタマイズすることを求めている。

一方、新しい学習指導要領における小学校、中学校、高等学校の「特別活動」の学級活動・ホームルーム活動の内容については、①学級・ホームルームや学校における生活づくりへの参画 ②日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全 ③一人一人のキャリア形成と自己実現 が共通して示されている。その中で、「特別活動」の学級活動・ホームルーム活動におけるキャリア・ポートフォリオやキャリア教育の位置づけを考えると、特に、③一人一人のキャリア形成と自己実現 が

大きく関わることになるといえる。

本稿では、特別活動で行う、文部科学省が作成した「キャリア・パスポート」例示資料と、それをもとにして、地域においてカスタマイズされたキャリア・ポートフォリオを比較しながら、批判的検討を含めた分析を行うことで、特別活動で行う、これからのキャリア・ポートフォリオやキャリア教育のあり方、可能性を考察していくことにする。

## II 先行研究と目的

キャリア教育の中核となる教科の明確化の検討が行われてきた結果、文部科学省（2016）に特別活動を要とした取り組みが提言され、「キャリア・パスポート」の活用が提示された。それ以来、キャリア・ポートフォリオに関連した論考が刊行されている。

社会の要請との関連からその必要性を論じた藤本（2021）では、具体的に、Society5.0、OECD Education 2030 プロジェクト、経済産業省「未来の教室」ビジョン、GIGA スクール構想、総務省「情報通信白書」のそれぞれの視点から、総じてキャリア教育の必要性、「キャリア・パスポート」の重要性を論じている。

次に、キャリア・ポートフォリオに必要な構成要素としての観点から、胡田ら（2018）は、全国の都道府県で刊行されたキャリア・ポートフォリオを活用した実践報告を調査し、必要な構成要素として、実践の継続性と内省の深さの程度を示した発展性の観点から、キャリア・ポートフォリオの特徴を明らかにした。課題として、他者との関わりと教師の仕掛けについて言及している。さらに清水ら（2020）は、胡田ら（2018）で提示した構成要素に、過去一現在一未来から振り返る時間的展望の視点と自己、仲間、教師、他者（専門家、保護者など）に関わる評価の視点を加えた上で、キャリア・ポートフォリオの特徴を明らかにした。その中で、評価の活用のあり方についての検討が必要だとする課題を挙げている。

次に、梅田ら（2020）は、「キャリア・パスポート」を活用する際に、「語り」である「ナラティブの視点」を取り入れることを提案し、「生徒自身の『キャリア・ナラティブ』を自分自身で、あるいは、教師や他の生徒らとともに振り返るような機会や活動を設定することで、自身のキャリアを再構成する機会になるだけでなく、『ナラティブ・コミュニティ』としての学級の〈文化〉の協働的創造の契機となる可能性が指摘できる」としている。

最後に、胡田（2021）は、生徒指導、進路指導、キャリア教育に通底した、成長を促す指導の観点から、「キャリア・パスポート」導入に際する留意点として、①教師以外の他者との関わりと評価の視点、②個々の事情への配慮、③教師の関わりとその役割を挙げている。①については、それ自体の重要性は認めつつも、教師以

外の他者の介入については、深い内容については本音で語れないなど否定的に捉える場合が考えられるので、それを工夫し、どのように乗り越えられるかという課題を挙げている。また、③の「教師の関わり」については、教師の子どもたちに対する働きかけをより効果的にすることと、それを可能にするために教師へのキャリアカウンセリングを含めた教師を支援する働きかけの両面が必要になると指摘し、「教師の役割」については、確かな見通しを備えた「教育的仕掛け」、「教師の仕掛け」の必要性を指摘している。

以上のように、社会情勢との関係からキャリア教育の必要性が論じられるとともに、記述し蓄積する教材としてのキャリア・ポートフォリオに盛り込むべき構成要素の解明や、それらがより効果的に運用されるための方略などがこれまでに論じられてきたといえる。

したがって、本稿の目的は、これらの論考で積み上げられた指摘や課題を乗り越えるために、キャリア・ポートフォリオの成熟の程度について学生による記述の分析を通して、特別活動で活用するキャリア・ポートフォリオ、並びにキャリア教育の今後の可能性を考察することである。また、本稿は、前述の通り、教員養成課程に属する、すでに教育実習を終えた学生の記述を分析することより、近い将来、教師になろうとする学生がどのような受け取り方をするのかを分析することになるので、教師教育の観点からも調査の結果は意義あるものになる。

## III 研究方法

### 1 研究対象

20XX 年度<sup>3</sup>、大学の教員養成課程に所属し、初等教育、中等教育の各教科等を専攻する学生、特別支援学校教員、養護教諭養成を専攻する学生から構成された 4 年生を中心としたクラス 83 名（内、5 名が院生）を対象にして、筆者は教職に関連する進路指導とキャリア教育に焦点をあてた科目を半期（前期）の授業として担当した。本稿では、そのうち、キャリア教育に関連した領域を対象にした。

### 2 調査内容と分析方法

調査については、20XX 年度前期の進路指導とキャリア教育を扱った授業の中でキャリア教育に関連した領域を扱った第 7 回から第 15 回の授業のうち、キャリア・ポートフォリオに直接焦点を当てた第 10 回の授業を対象にした。その中で、キャリア・ポートフォリオの 2 種類の書式の特長について受講生に記述を求めた。一つは、文部科学省が作成した「キャリア・パスポート」例示資料、もう一つは、愛知県においてカスタマイズされたキャリア・ポートフォリオ（愛知県教育委員会、2019）を取り上げた。当該授業では、キャリア・ポートフォリオの全体的な説明を行ったあと、「キャリア

教育ノート編」の小学校用、中学校用、高等学校用から学生が各自の関連の深い校種を選び、そのすべてについて考察するよう促した。分析方法については、それぞれのキャリア・ポートフォリオの特長について考察することで得られた記述を、樋口（2014）で開発されたテキストマイニング KHCoder（Version khcoder-3b03a）を使用し計量テキスト分析をすることにした。両者の記述の比較をする場合に視覚的にイメージしやすいと考えたことが本分析方法を採用した理由である。

### 3 授業の内容について

前節に示した第 10 回の授業の位置づけや授業の全体構造を確認するため、進路指導とキャリア教育を扱った授業の内容を表 1 に示す。授業目標としては、「進路指導・キャリア教育の目的・内容・方法についての基

礎的理解を図るとともに、進路指導については、青少年の職業観・勤労観の形成、進路選択・職業選択等に関する課題をとりあげ、対応の具体的方向性について学習する。また、キャリア教育においては、文部科学省が提示する新しい取り組みや先進的な学校の事例を多く取り上げる。その上で、社会との関わりの中でどのように生きていくことできるのかという問いについて検討する」とした。授業計画・方法としては、「授業の前半は、講義を通して進路指導・キャリア教育についての意義や内容、方法、あるいは事例紹介などから理解を深める。後半は、それらをもとに、自己の意見を他者にわかるように伝え他者の意見を理解することに重点を置きながら、異なる意見の中から自己の深い学びにつなげることを目指す」とした。

1

表 1 「進路指導とキャリア教育」の授業内容

回	授業内容
第 1 回	オリエンテーション（進路指導・キャリア教育について児童生徒時代を振り返る）
第 2 回	進路指導の理論と実践（1）歴史、定義と目標
第 3 回	進路指導の理論と実践（2）6つの役割
第 4 回	進路指導の理論と実践（3）児童生徒理解と自己理解
第 5 回	進路指導の理論と実践（4）進路指導の実際（課題と現状 1）
第 6 回	進路指導の理論と実践（5）進路指導の実際（課題と現状 2）
第 7 回	キャリア教育（1）歴史、定義、意義等
第 8 回	キャリア教育（2）政策の動向 1
第 9 回	キャリア教育（3）政策の動向 2
第 10 回	キャリア教育（4）キャリア・ポートフォリオ
第 11 回	キャリア教育（5）キャリア発達課題と理論
第 12 回	キャリア教育（6）キャリアカウンセリング
第 13 回	キャリア教育実践（1）小中連携によるキャリア教育
第 14 回	キャリア教育実践（2）高等学校による地域連携・課題解決型のキャリア教育
第 15 回	進路指導とキャリア教育のまとめ（次代を拓くキャリア教育の展開）

## IV 研究結果

文部科学省が提示した「キャリア・パスポート」例示資料とそれをもとにカスタマイズされた愛知県のキャリア・ポートフォリオのそれぞれの書式を熟読後、それらの特長（関心を持ち良いと思った点）を記述したものを樋口（2014）で開発されたテキストマイニング KHCoder（Version khcoder-3b03a）を使用し計量テキスト分析をすることにした。その際、共起ネットワークコマンドを用いて、教師を目指す学生の視点からの意見の分析を行った。「共起ネットワーク」とは、強い共起関係ほど濃い線で描画できたり、出現数の多い語ほど大きい円で描画できたりする（樋口，2014）特徴をもつ。共起ネットワークを用いて語と語のつながりや関連の強度などが可視化できる。図 1 は「キャリア・パスポート」例示資料の特長を示し、図 2 は愛知県のキャリア・ポートフォリオの特長を示したものであり、小

学校用、中学校用、高等学校用、特別支援学校用（愛知県）を学生たちが読んで記述したそれぞれ 94 件、119 件の結果である。また、図 3、図 4 は、図 1、図 2 を補完するものとして示す。つまり、図 3 は図 1 における 7 回以上の抽出語と出現回数を示し、図 4 は図 2 における 7 回以上の抽出語と出現回数を示す。

図 1 では、1-1.〈自分〉と〈書く〉が特に多くの項目と連携し、しかも強く関わっている。少し俯瞰的にみると、〈自分〉、〈書く〉、〈目標〉、〈振り返る〉、〈考える〉などの項目が強固に結びついているのが見てとれる。この部分を「キャリア・パスポート」の本質と捉えている。また、1-2.〈書く〉の周辺では、〈先生〉、〈メッセージ〉、〈教師〉、〈コメント〉、〈生徒〉、〈児童〉の項目が連なり、評価の視点を挙げている。つまり、仲間などの「相互評価」、教師からの「教員評価」の視点である。1-3.〈活動〉の周辺には、〈行事〉、〈学校〉、〈家庭〉、〈生

1

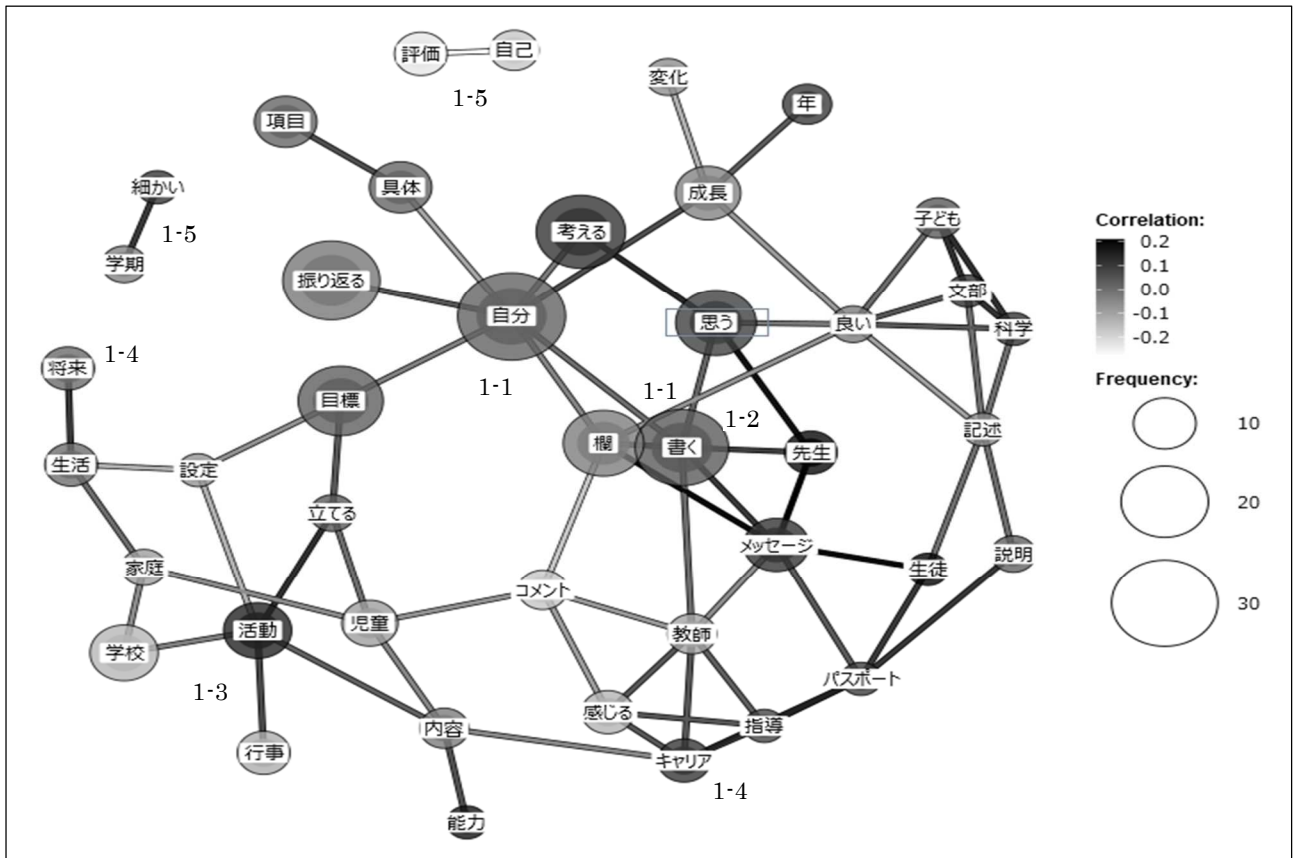


図1 「キャリア・パスポート」例示資料の特長

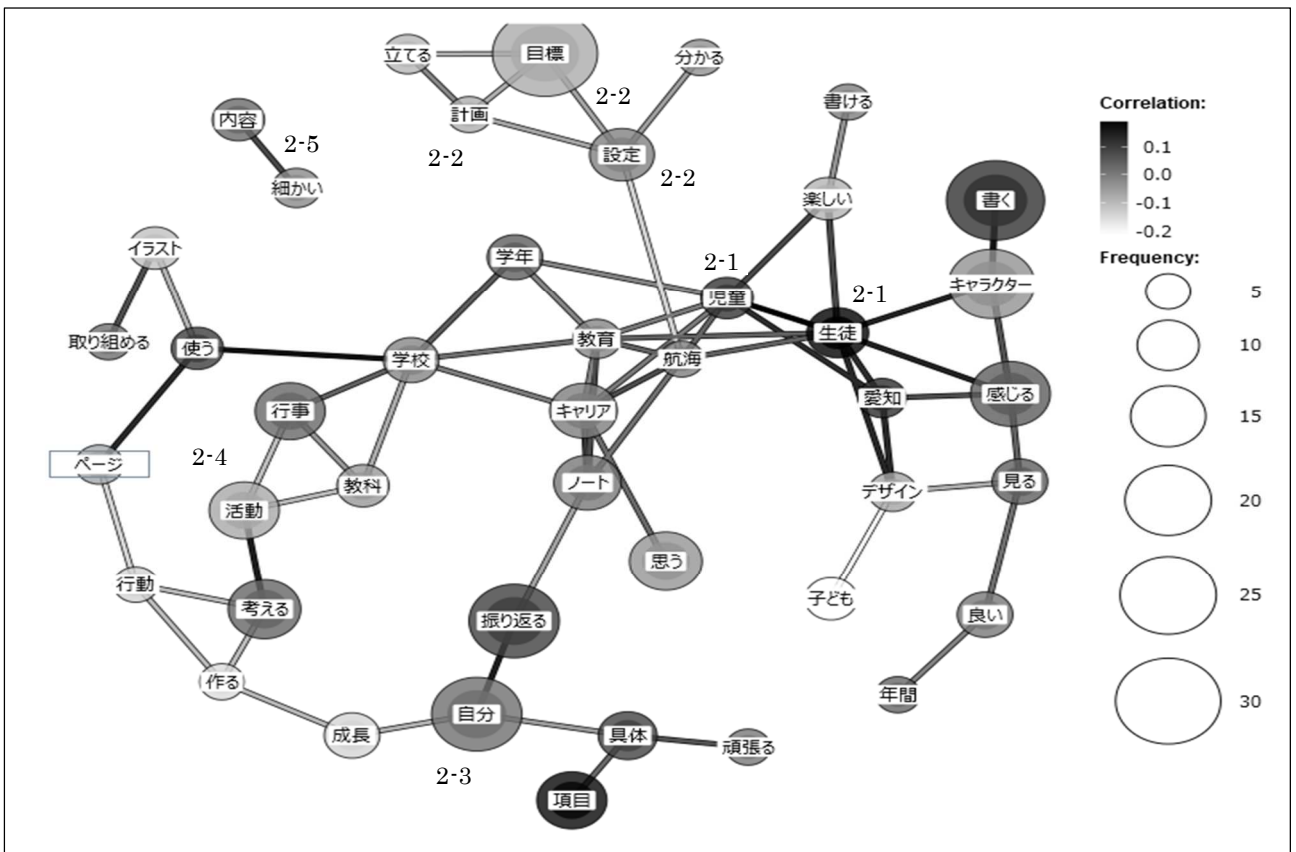


図2 愛知県のキャリア・ポートフォリオの特長

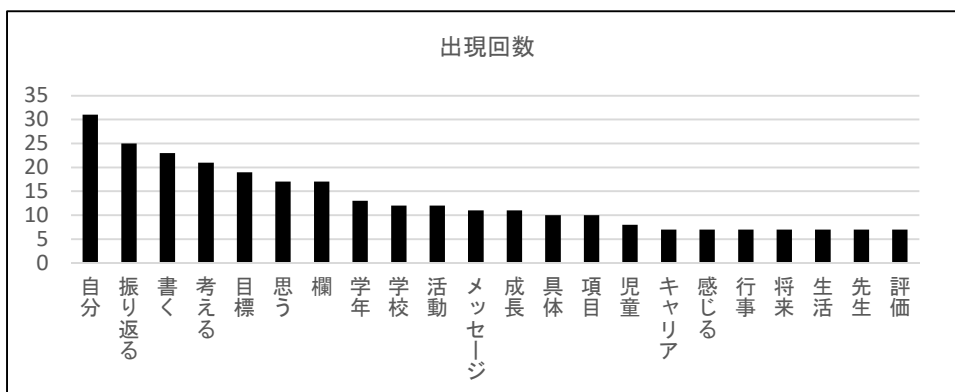


図3 「キャリア・パスポート」例示資料における抽出語と出現回数 (7回以上)

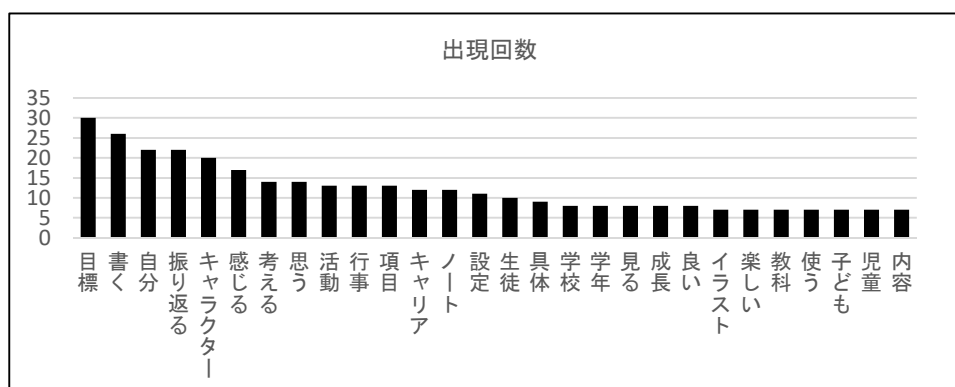


図4 愛知県のキャリア・ポートフォリオにおける抽出語と出現回数 (7回以上)

活)などの項目が並んでいる。1-4.〈キャリア〉、〈将来〉のそれぞれの項目は、つながっているが距離は遠い。1-5.〈評価-自己〉、〈学期-細かい〉は他の項目とつながっていない。全体的には、〈自分〉、〈書く〉、〈活動〉のそれぞれが中心になる3つのブロックを中心に構成されている。

一方、図2では、2-1.〈児童〉、〈生徒〉が特に多くの項目と強く結びついている。2-2.〈目標〉、〈計画〉、〈設定〉のそれぞれの項目は関連しているが中心には位置していない。2-3.〈児童-生徒〉を中心としたブロック以外に、〈自分〉を中心にしたブロックが存在する。2-4.〈活動〉の周辺には、〈行事〉、〈学校〉、〈教科〉などの項目が並んでいる。図1には見られなかった〈教科〉の視点が加わった。2-5.〈内容-細かい〉は他の項目とつながっていない。全体的には、〈児童-生徒〉、〈自分-振り返る〉、〈目標〉、〈活動〉のそれぞれが中心になる4つのブロックを中心に構成されている。なお、図の中に、〈航海〉や〈キャラクター〉の項目がある。これらについては、愛知県のキャリア・ポートフォリオの名称が、キャリア教育ノート「夢を見つけ 夢をかなえる航海ノート」であることや「キャプテン・アイリス」という名前の愛知県キャリア教育マスコットキャラクターが存在することが影響していると思われる。

## V 考察

文部科学省「キャリア・パスポート」例示資料、そして、それをもとにカスタマイズされた愛知県のキャリア・ポートフォリオに関してそれぞれの特長を示した、学生による記述を分析した。その結果から、いくつかの点を指摘することができる。

一つ目は、前章のそれぞれ1-1と図2の全体結果で示した〈自分〉が〈振り返る〉こと、そして、1-1と2-2で示した〈目標〉を〈設定〉することというキャリア・ポートフォリオの本質が両方に捉えられていること。

二つ目は、1-5、2-5で示した通り、独立しているのは、図1、図2ともにキャリア・ポートフォリオの形式のことについて言及されているからであろうが、特長に挙げていることより〈細かい〉を良いことと捉えている。また、図1の〈書く〉を中心にした〈教師〉、〈コメント〉などの他者による評価を表すブロックと1-5で示した〈評価-自己〉が独立して離れているということは、評価の中でも、自己評価と他者評価は別物と捉えていることが考えられる。そのような理解の仕方をしたということになるのだろう。

三つ目は、1-3、2-4で示した〈活動〉について、図1では主に「総合的な学習の時間」、「特別活動」を通した振り返りを意味していたが、図2ではそれに〈教科〉の視点が加わっていること。

四つ目は、図1、図2の両方に、〈児童〉、〈生徒〉の項目があるが、これは、意味内容が異なっている。図1では他者としての三人称で表され、図2では一人称の意味も含めた形で表出されている。したがって、図2の2-1と2-3で示した〈児童-生徒〉を中心としたブロック以外に、〈自分〉を中心としたブロックが存在することより、他人事ではなく、より自分ごとに事象を引きつけながら考えやすくなったと捉えたこと。その要因の一つは、〈キャラクター〉の存在が影響していると考えられる。

五つ目は、図1の1-4の関連で、〈キャリア〉、〈将来〉の関連について、図2では、〈将来〉という項目が表出されていないこと。過去・現在・未来で捉える時間的展望の観点をどのように捉えたのか。

六つ目は、1-2で示したように図1で表されていた相互評価や教員評価などの他者からの評価の視点が、図2では表されていないこと。

以上のことが考えられるが、特に五つ目と六つ目に関しては、愛知県が作成したキャリア・ポートフォリオのシートには、それぞれに指摘した内容（時間的展望の視点、他者からの評価の視点）は示されているので、前者（文部科学省）で良いと感じた内容は、それを前提にしていることより、後者（愛知県）では記述しないということが考えられる。あるいは、それ以上に関心を持った内容を記述することで捨象された状態になったとも考えられる。いずれにせよ、2つのキャリア・ポートフォリオをそれぞれプラス面で捉えた結果を総合して考察することで、その背景に潜んでいる特徴を捉えることが可能になった。

したがって、以上をキャリア・ポートフォリオの発展の過程と捉えた上で整理すると、①キャリア・ポートフォリオ活用の際、教科の視点が今まで以上に加えられたこと。②キャリア・ポートフォリオをより自分事として捉えやすくなったこと。ということが大きな特長としていえる。①に関しては、教科におけるキャリア教育という観点で以前からも指摘されている内容である。高等学校の文脈であるが、リクルート進学総研(2019)では、キャリア教育を実施する時間について、「教科の時間」の実施率は22.6%<sup>4</sup>である。「総合的な学習の時間」、「特別活動」と比較をしても、また調査の年度だけでなく過去を遡っても低迷状態が続いており大きな課題になっていた。キャリア教育が教育活動全体を通じて行われると明示されていることから考えると、キャリア・ポートフォリオに充実した教科の視点を位置づけることは、特に中学校・高等学校では学級担任と教科担当の連携を促進することにもつながり、特別活動と各教科をつなぐ上で相互補完的な役割を果たすことになると期待できる。次に、②の「自分事」に引き寄せることについては、2章で示した胡田ら(2018)、胡田(2021)で指摘された「教師の仕掛け」の必要性と大

きく関連する。「教師の仕掛け」とは、子どもたちの深い学びを促進するために、気づきを与え主体的に物事に関わりを持たせようとする「教育的仕掛け」のことである。そのように考えると、愛知県の場合、マスコットキャラクターの存在がキャリア・ポートフォリオを自分事に引き寄せる要因の一つになったと考えられるが、これはまさに「自分事」に引き寄せるための「教育的仕掛け」に他ならない。「自分事」を構成する中心概念としては「主体性」が一つの手掛かりになる。そしてその「主体性」を形づくる概念としては「当事者性」、「切実性」などが考えられる。キャリア教育の観点からすると、他者との関わりや社会との関わりなどから自己に返すことが重要になる。つまり、他者との関わりや社会との関わりなどから得たことを自己に関連付けながら自己に問い、自己の学びに変換させることが重要となる。こうした考え方を通して、職業に関することを含めた生き方全体について見通しをつけながら形成していく過程が目指される。

その上で、「自分事」の形成を仕掛ける方法論を考えると、キャリア・パスポート自体の形式や問い方、または外部要因によって自分事へと形作る必要がある一方で、さまざまな活動をキャリア・パスポートに記述することを考えると、その活動の中身を自分事に近づける工夫が必要になる。図1、図2の〈活動〉を中心としたブロックの中の〈教科〉については前述したので、ここでは、教科以外の総合的な学習の時間などに関連する内容について確認する。それらの一例を挙げてみたい。他者との関わりに関して、島田(2006)は、高等教育の文脈ではあるが、「他者との出会いを仕掛ける授業」を構想する中で、「傷つくことからひらかれる」として、「自分試し」と「自分さらし」をキーワードに挙げている。引用すると、「〈自分試し〉は、自分の世界にはまだないものに、自分の身についていないものに挑戦することを目指す。未知なる世界に自分を放りだし、試行錯誤し、ときには失敗をものとし、自分を磨いていく。自分づくりとっていいだろう。〈自分さらし〉は、今あるもの、今まであるものを外にだすことを目指す。あるがままの自分をさらしていく。ときには人目にさらしたくない自分の弱い部分をさらしていく。『つくったキャラとしての自分』ではなく、『素の自分』をだすというもいい」。これは、他者を通して、インプットとして得たことを自己に問い、学びに変えながらアウトプットとして素の自分を出すという構造がそのしくみに示されている。一方、社会との関わりに関しては、地域連携・課題解決型のキャリア教育実践としての「SL(サービス・ラーニング)」を挙げることができる。日本では、中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」(文部科学省、2002)により政府からの支援を得て導入されるようになった。倉本(2006)では、「SL(サービス・ラーニング)は、生徒

たちが主体的に参加するサービス経験を統合化し、その学習経験を発展させていく教育方法である。その経験はコミュニティの必要性に適合するものであり、学校とコミュニティを関連させ、生徒たちの体験を学的カリキュラムのなかに統合化していくものである。SL（サービス・ラーニング）は学校での学習経験を活用しながらコミュニティに貢献するサービス体験を通して主体的な学習経験をするものであり、コミュニティの一員としての自覚と責任も学ぶものである」

と説明している。これは、コミュニティに貢献するサービス体験を通して、自己に問い、その過程や結果を自己の学びにつなげることで主体的な学習経験を果たすことを示している。以上の内容が成り立つならば、「自分事」を形成するキャリア教育の学びのモデル（図5）を仮説的に示すことができる。学びを自分事へとつなげる場合、キャリア・パスポートそれ自体とそれを充実させる活動内容について、その両面から総合的に構築していくことが求められる。

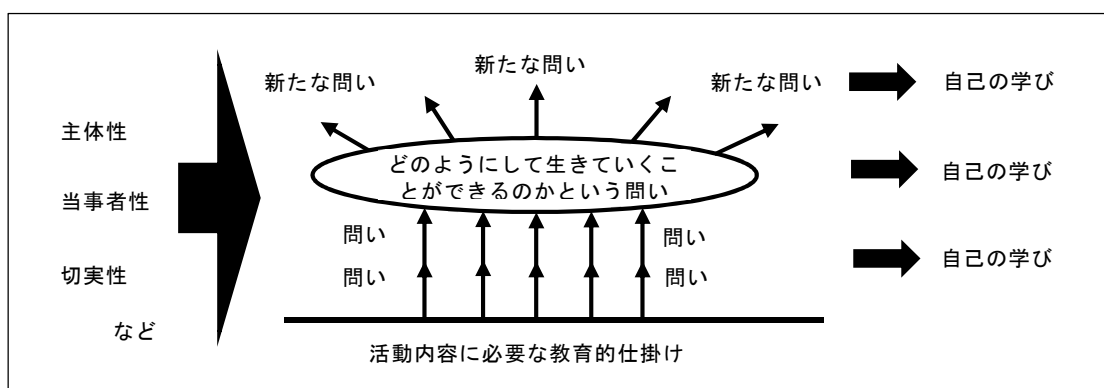


図5 「自分事」を形成するキャリア教育の学びのモデル

## VI まとめと今後の課題

本稿の目的は、キャリア・ポートフォリオの成熟の程度について学生による記述の分析を通して、特別活動で活用するキャリア・ポートフォリオ、並びにキャリア教育の今後の可能性を考察することであった。本稿の調査内容をキャリア・ポートフォリオの発展の過程と捉えた上で示された結果を整理すると、①キャリア・ポートフォリオ活用の際、教科の視点が今まで以上に加えられたこと。②キャリア・ポートフォリオをより自分事として捉えやすくなったこと。という2点が明らかになった。現在、キャリア・ポートフォリオは多くの都道府県や市町村、あるいは各学校でカスタマイズされ作成されている。本稿の調査は、その一事例であり、学生のみ意見に基づいた結果である。また、その結果について様々な読み取り方が可能なのかもしれない。その中で、一事例からキャリア・ポートフォリオ、並びにキャリア教育の可能性を見出そうとした。

前章で教育的仕掛けに基づいた教育活動について、主体性を発揮しながら自己に問い、それを学びにつなげるモデルを提示した。そこで、留意する必要がある点について今後の課題として示しておきたい。それは、「教育的仕掛け」と「主体性」の関係についてである。「教育的仕掛け」には、学びを豊かにする可能性がそのシステムに内在されているとみてよい。しかしながら、例えば、日本における「サービス・ラーニング」の課題は、小畑（1994）が「サービス・ラーニング」導入前から指摘している通り、「合意の強制」と「不合意の共生」

にある。教育活動に関連付けていけば、教師が良いと考えたことについては、強制してしまうことにならないのかという警告である。子どもたちが合意をしなければならぬ状況が出来上がってしまい、不合意を発すれば、共に生きていくことができなくなるという比喩的な意味と捉えることができる。これは、「ポストコロナ」に代表される「教育の暴力性」に関わる問題を孕んでいる。そうした問題を解きほぐす道筋として、小玉（2003）は、シティズンシップ教育の文脈で、「誘導ではなくあくまでそのきっかけを与えるだけに留める。なぜなら、教師からすると生徒は他者であり思い通りにならない存在であるから」として、「自己喚起」させることの重要性を説いている。その一方で、山本（2019）は、教師の指導性と子どもの自主性についての文脈で、「教師の指導性が強くなると子どもの自主性が弱くなり、教師の指導性が弱くなると子どもの自主性が強くなるというのではなく、また両者のバランスを適当なところでとるというのでもない。子どもの自主性は優れた指導性のもとで発揮されるが、稚拙な指導性のもとでは発揮されないのである」としている。それぞれ示唆深い指摘がなされている。これらを総合して考えた場合、どのような方法が考えられるのか。改めて考える必要がある。

以上、特別活動で活用するキャリア・ポートフォリオ、並びにキャリア教育の今後の可能性を考察したが、本稿で取り扱ったキャリア・ポートフォリオについて、その活用や実践は2020年度から始まったばかりである。

したがって、特別活動が目指す「一人一人のキャリア形成と自己実現」に資するキャリア・ポートフォリオの研究並びに実践の積み重ねが今後益々必要になる。

## 注

- 1 本稿では、キャリアに関わる内容を記録し蓄積する教材を総称して示す場合、「キャリア・ポートフォリオ」を使用する。ここでは、文部科学省が作成したキャリア・ポートフォリオのことを「キャリア・パスポート」という固有名詞で使用している。
- 2 キャリア・パスポートをめぐる動向については、胡田(2021)を参照。
- 3 研究協力者の特定を防ぐために年度を伏せた。
- 4 リクルート進学総研(2019)では、キャリア教育の実施率は、「総合的な学習の時間」が77.5%で一番高く、次いで「ホームルーム活動」が56.7%で二番目に高くなっている。

## 参考文献

- 愛知県教育委員会(2019)「キャリア教育ノート」 夢を見つけ夢をかなえる航海ノート  
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tokubetsushienkyoiku/0000000001.html> (2021年5月確認)
- 胡田裕教・清水克博・高綱睦美・鈴木稔子・角田寛明・柴田好章(2018)「初等中等教育におけるポートフォリオを活用したキャリア教育の現状と課題—実践の継続性・発展性の可視化を目指して—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究センター紀要(生涯学習・キャリア教育研究)』第14号, pp. 13-25
- 胡田裕教(2021)「生き方に関わる生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の可能性—成長を促す指導の観点から—」『大阪工業大学教職教室紀要』第4号, pp. 41-50
- 藤本 仁(2021)「今、なぜ、キャリア教育—キャリア・パスポートの重要性—」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第65号, pp. 21-46
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 小玉重夫(2003)『シティズンシップの教育思想』白澤社
- 倉本哲男(2006)「米国のサービス・ラーニングに関するカリキュラムマネジメントの一考察—学校とコミュニティとの「協働性」を中心に—」『日本教育経営学会紀要』第48号, pp. 52-67  
(原典) Wade, R. "Community Service-Learning, A Guide to Include Service in the Public School Curriculum," State University of New York Press,

1997, pp. 19-22

- 文部科学省(2002)中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」
- 文部科学省(2016)中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」
- 文部科学省(2018a)『小学校学習指導要領(平成29年告示)』東洋館出版社
- 文部科学省(2018b)『中学校学習指導要領(平成29年告示)』東山書房
- 文部科学省(2019a)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』東山書房
- 文部科学省(2019b)『「キャリア・パスポート」例示資料等について』
- 小畑清剛(1994)『レトリックの相克—合意の強制から不合意の共生へ—』昭和堂
- リクルート進学総研(2019)「高校教育改革に関する調査2018」報告書  
[http://souken.shingakunet.com/research/kaikaku2018\\_houkoku.pdf](http://souken.shingakunet.com/research/kaikaku2018_houkoku.pdf) (2021年5月確認)
- 島田博司(2006)『他者との出会いを仕掛ける授業—傷つくことからひらかれる—』人文書院
- 清水克博・胡田裕教・角田寛明(2020)「初等中等教育におけるポートフォリオを活用したキャリア教育の現状と課題—学びの継続性、時間的展望、発展性と学びの評価の観点からの考察を通して—」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第5号, pp. 49-58
- 梅田崇広・藤村晃成・長谷川祐介(2020)「特別活動におけるキャリア教育の推進(1)—体育大会の「朝練」をめぐる話し合い活動を事例に—」『大分大学教育学部研究紀要』第42巻第1号, pp. 85-98
- 山本敏郎(2019)「子ども理解と教師の指導・支援」春日井敏之・山岡雅博 編著『生徒指導・進路指導』ミネルヴァ書房 pp. 57-72